

<研究題目> 音楽を「好きになること」の意味について

～竹田青嗣の「エロス論」を基底として～

<目次>

<序論>

1. 研究の動機
2. 研究の方法
3. 研究の目的

<本論>

第1 章 竹田青嗣の「エロス論」

- 1.1 現象学とは
- 1.2 「エロス論」とは
- 1.3 「エロス論」から見た「音楽」

第2 章 「好きになること」についての考察

- 2.1 「好き・嫌い」の分節の原理
- 2.2 好きになることのメカニズム
- 2.3 好きになることのプロセス
- 2.4 個人の嗜好・価値観

第3 章 音楽を好きになるような指導法

- 3.1 音楽を「好きになること」に必要な要素
- 3.2 音楽を学ぶことの意味
- 3.3 指導案例

<結論>

<参考文献>

竹田青嗣 著『現象学入門』日本放送出版協会 1989 年

竹田青嗣 著『はじめての現象学』海鳥社 1993 年

竹田青嗣 著『エロスの世界像』講談社 1997 年

他

<研究の要約>

本研究は、「音楽を好きになる」とはどのようなことなのか、どのようなプロセスをたどるのかについて、竹田青嗣の「エロス論」を基底として考察し、それを踏まえた上で、児童・生徒が音楽を学校で学ぶ意味を見出し、それらを音楽授業に生かす手立てを探ることを目的としている。

「エロス論」とは、竹田青嗣が提案した、エロスによって「世界」が秩序化・構造化されている、という世界像のとらえ方のことである。ここでいうエロスとは、生き物が何らかの快の情動によって対象に惹きつけられるという意味での力動、つまりは、主体と対象の間にある、引き付けの力のことをいう。このエロスと対になっているのが欲望という言葉で、それは主体の側から生じる、エロスの対象を味わおうとする意欲のことを指している。そして、この二つの要素に加えて大切になるのが、人間は自分の存在可能をめがけて生きる存在である、という考え方である。存在可能とは、これから先の自分は「こうでありうる」、「ありたい」という可能性のことで、人間は、常にどんな時でもそれに向かって生きている、とされている。

「好き・嫌い」という人間の分節の原理は、欲望に従って、事物・ことがらといった「世界」を、感じとして味わった結果、自分の「自我」が「快(身体的な気持ちよさ)」、「よい(関係的な気持ちよさ)」、

「きれい(感性的な気持ちよさ)」、「ほんとう(自分に価値のあるものをもたらすという確信)」という情動を感じ取ったかどうかで区分されることにある。「快」、「よい」、「きれい」、「ほんとう」という感じを受けることによって、人間はその対象に存在可能を感じるようになる。そして、存在可能を与えるような情動を感性化することで、周りの事物・事象の中でも、特に自分にとってエロスを持つものを直観できる能力を身に付けることによって、人間の感受性(価値観)が形成されていく。また、人間の感受性・価値観の特徴として、自分では嗜好の成立の過程・根拠を知ることができないこと、各個人によって全く異なる感受性・価値観を形成するということが挙げられることがわかった。人によって好む対象・求める存在価値が異なるということは、各人のエロスの世界の構成要素が違う、自分にはないと感じているものが違うということになる。これらのことから私は、「音楽を好きになる」とは、「音楽によって得ることのできる存在可能を自分の世界に必要とすること」である、という仮説を立てた。ここでいう、「音楽によって得ることのできる存在可能」とは、音楽から「快」、「よい」、「きれい」、「ほんとう」という情動を感じるによって得ることができるものだろう。音楽における「快」の情動の要素として、音楽を聞くこと、演奏することによって気分が良くなること、「よい」の情動の要素として、自分の演奏が人から認められる・誉められること、また、自分の好きな曲が他の多くの人に同じように認識されること、「きれい」の情動の要素として、音楽を聞くことによってもたらされる「ロマンティズム」、「センチメンタリズム」といった情緒が味わわれること、「ほんとう」の情動の要素として、この音楽は自分にとってよいものだという確信をかんじること等が挙げられる。

また、個人の感受性・価値観の違いが、求める存在可能の違いであり、人によって現れるその違いが当然のものであるとすると、必ずしも音楽を好きにならなくてははいけないわけではない、ということが考えられる。そうであるとするとき、「エロス論」の観点から、存在可能を感じさせる対象としての「音楽を学ぶことの意味」を明らかにしたいと考えた。いくつかのパターンに分けて考えると、第1のパターンとして、学校で音楽を学ぶ前から音楽に対して存在可能を感じていた子どもにとっての「音楽を学ぶことの意味」は、存在可能の実現と高次化を行うことである。第2のパターンの音楽に対して存在可能を感じていない子どもにとっての「音楽を学ぶことの意味」は、今まで知らなかったエロスの可能性に触れ、新しい存在可能を手に入れるきっかけをつかむということである。第3のパターンとして、第1、第2の全ての子どもに共通する「音楽を学ぶことの意味」は、学校での音楽授業の中でしか得ることのできない、音楽の存在可能の幅を広げることである。これらのことから私は、「音楽を学校で学ぶことに意味」とは「音楽に関する様々なエロスの可能性をひろげること」であるという仮説を立てた。

この仮説を踏まえて、実際に存在可能を感じさせることができるような授業案を考える際に、前提としたい項目を作る必要があると考えた。その項目とは、まず、従来のような、子どもは生まれつき音楽が好きなものという前提にたつて、子どもたちの好きな音楽を使って、子どもたちの好むような活動を取り入れよう、と考えるのではなく、提供する音楽の中からできるだけ多くの「存在可能」を子どもたちに感じてもらえるように指導の方法を工夫し、授業を行うという信念を持つこと、次に、感受性の形成は音楽だけの要素に因るものではないことから、普段から個々の子どもがどのようなことに興味を示し、得意としているのか把握に努めること、次に、世界には「最も美しい音楽」は存在しないことを認識すること、そして、教師自身が自分の感受性・価値観について分析・把握しておくことの4つである。この前提の上に、1.教師の好きな曲を題材とする、2.一人一人が集団の中で独立した役割を持つような活動を行う、3.様々な時代・国の音楽から時間性の情緒を味わう、4.子どもたち自身の嗜好を探るような活動を行う、といった授業案を提案したいと考える。しかし、これらの4つの例については、実現可能であるか、また、教育的価値はあるのか、そして、本当にこのことによって存在可能を感じることができるのかについては今後の課題としたい。